瘤とり

楠山正雄

一

むかし、むかし、ある所に、一人のおじいさんがありました。右のほおにぶらぶら大きな瘤をぶら下げて、始終じゃまそうにしていました。

ある日、おじいさんは山へ木を切りに行きました。にわかにひどい大あらしになって、稲光がぴかぴか光って、ごろごろ雷が鳴り出しました。そのうち雨がざあざあ降ってきて、うちへ帰るにも帰れなくなりました。どうしようかと思って見回しますと、そこに大きな木のうろを見つけました。しかたがありません

から、その中に入って、雨の小やみになるのを待っているうちに、いつか日はとっぷりくれてしまいました。深い山の中には、もうきこりの木を切る音もしません。木のうろの外は、一面真っ暗やみの中に、すさまじいあらしが、うなり声を立てて通っていくだけです。

おじいさんはこわくって、こわくって、たまらないので、夜通し目も合わずに、うろの中に小さくなっておりました。

夜中になって、雨がだんだん小降りになり、やがてあらしがぱったりやみますと、はるか高い山の上から、なんだか大ぜいががやがや騒ぎながら、下りてくる声が

しました。
おじいさんは今まで一人ぼっちで、寂しくってたまらなかったところですから、声を聞くとやっと生き返ったような気がしました。
「やれやれ、お連れが出来て有り難い。」
といいながら、そっとうろの中から顔を出してのぞいてみますと、まあどうでしょう、それは人ではなくって、ふしぎな化け物が、何十人となくぞろぞろ出てくるのです。青い着物を着た赤鬼もいました。赤い着物を着た黒鬼もいました。それが山猫の目のようにきらきら光る明かりを先に立てて、どやどや下りてくるの

です。

おじいさんは肝をつぶして、またうろの中へ首を引っ込めてしまいました。そしてぶるぶるふるえながら、小さくなって息を殺していました。

鬼どもはやがて、おじいさんの居るうろの前まで来ますと、がやがやいいながら、みんなそこに立ち止まってしまいました。おじいさんは、「おやおや。」と思いながら、いよいよ小さくなっていますと、そのうちのおかしららしいのが、真ん中に座って、その右と左へ外の鬼たちがずらりと二かわに並びました。よく見ると目の一つしかないのや、口のまるでないのや、鼻の

欠けたのや、それはそれは何ともいえない気味の悪い顔をした、いろいろな化け物が押しくらをしておりました。

そのうちお酒が出ますと、みんなお互いに土器のお杯をうけたり、さしたり、まるで人間のするとおりの、楽しそうなお酒盛りがはじまりました。

お杯の数がだんだん重なるうちに、おかしららしい鬼は、だれよりもよけいに酔って、さもおもしろそうに笑いくずれていました。すると下座の方から、一人の若い鬼が立ってきて、お三方の上に食べ物をのせて、おそるおそるおかしらの鬼の前へ持って出まし

た。そして何(なに)かわけの分(わ)からないことをしきりにいっているようです。おかしらの鬼(おに)もお杯(さかずき)を左(ひだり)の手に持(も)って、おもしろそうに笑(わら)いながら聞(き)いています。その様子(ようす)は少(すこ)しも人間(にんげん)と違(ちが)ったところはありません。

やがておかしらは、

「さあだれか歌(うた)を歌(うた)う者(もの)はないか。踊(おど)りを踊(おど)る者(もの)はないか。」

といって、そこらを見回(みまわ)しました。

やがておかしらのそばに座(すわ)っていた鬼(おに)が、出(だ)し抜(ぬ)けに大きな声(こえ)で歌(うた)を歌(うた)い出(だ)しました。するとさっきの若(わか)い鬼(おに)も、すその方(ほう)から前(まえ)へ飛(と)び出(だ)してきて、さんざん

踊りを踊って引っ込みました。それから代わる代わる下座の方から、一人一人違った鬼が立ってきて、同じように踊りを踊りました。中には上手に踊ってほめられる者もあれば、ぶきような踊り方をして、みんなに笑われる者もありました。踊りがすむたんびに、ひんながぱちぱち手をたたいて、

「よいよい。」

とはやしました。

おかしらの鬼はその時、さもゆかいそうに高笑いをして、

「あッは、あッは。おもしろい、おもしろい。今夜の

ようなゆかいな宴会ははじめてだ。だがついでにだれか、もっとめずらしい踊りを踊って見せる者はないか。」

といいました。

おじいさんはさっきから、木のうろの中で体をこごめながら、それでもこわいもの見たさに、首だけのばして外の様子をのぞいていました。そのうちに、いったいがひょうきんなおじいさんのことですから、いつかこわいのも何も忘れてしまって、見世物でも見ている気で、おもしろがって鬼の踊りを見物していました。するうちに自分もだんだん浮かれ出してきて、

今のおかしらの鬼のいったことばが耳に入ると、自分もひとつ飛び出して、踊りを踊ってみたくなりました。

しかしうっかり飛び出していって、一口にあんぐりやられては大へんだと一度は思い返して、一生懸命がまんしていましたが、そのうち鬼どもがおもしろそうに手をたたいて、拍子をとり出しますと、もうたまらなくなって、

「ええ、かまうものか。出て踊ってやれ。食われて死んだらそれまでだ。」

とすっかり度胸をきめて、腰にきこりの斧をさして、烏帽子をずるずるに鼻の頭までかぶったまま、

「よう、こりゃこりゃ。」

といいながら、ひょっこりおかしらの鬼の鼻先へ飛び出しました。

あんまり出し抜けだものですから、こんどはおじいさんよりは、鬼の方がびっくりしてしまいました。

「何だ。何だ。」

「人間のじじいじゃないか。」

といいながら、みんなはそう立ちになって騒ぎました。

おじいさんはもうすましたもので、一生懸命、のびたり、ちぢんだり、縦になり、横になり、左へ行き、

右へ行き、くるりくるりと木ねずみのように、元気よくはね回りながら、

「よう、こりやこりや。」

とお酒に酔ったような声を出して、さもおもしろそうに踊りました。

だんだん鬼どももみんな釣り込まれて、いっしょに手拍子を合わせながら、

「うまいぞ、うまいぞ。」

「しっかりやれ。」

こんなことをいいながら、はちきれそうな大笑いをして、おじいさんの踊りに夢中になっていました。

踊りがすむと、おかしらも感心して、おじいさんに、

「こんなおもしろい踊りははじめてだ。じいさん、明日の晩も来て、踊りを踊るのだぞ。」

といいました。

おじいさんはとくいになって、

「へえへえ、おいいつけがなくともきっとまいりますよ。今晩は何しろ急なことで、おけいこをして来ませんでしたから、明日の晩までには、ゆっくりおさらいをしてまいりましょう。」

こういうと、その時右手の三ばんめに座っていた鬼が口を出して、

「いいや、ああはいっても、その場(ば)になると横着(おうちゃく)をきめて出(で)てこないかも知(し)れません。約束(やくそく)を違(ちが)えさせないために、何(なに)か、しちに取(と)っておいてはどうでしょう。」

といいました。

おかしらは、

「なるほどそれはいいだろう。」

とうなずきました。

「それでは何(なに)がいいだろう。何(なに)を取(と)り上(あ)げておいたものだろう。」

と鬼(おに)どもは、わいわい相談(そうだん)をはじめました。

「烏帽子(えぼし)がいい。」という者(もの)もありました。

「斧はどうだ。」という者もありました。

おかしらはみんなの騒ぐのを止めて、

「いや、何よりもいちばん、あのじいさんのほおの瘤を取るのがいいだろう。瘤は福のあるものだから、じいさんのいちばんだいじなものに違いない。」

といいました。

おじいさんは心の中では、「しめた。」と思いながら、わざとびっくりした風をして、

「おやおや、とんでもないことをおっしゃいます。目玉を抜かれましても、鼻を切られましても、この瘤を取ることだけはどうかごかんべん下さいまし。長年

の間、わたくしが宝のようにしてぶら下げている、だいじなだいじな瘤でございますから、これを取り上げられましては、ほんとうに困ってしまいます。」
といいました。
鬼のおかしらはこれを聞くと、
「それ見ろ。あのとおり惜しがっている瘤だ。あれに限る、取り上げておけ。」
といいました。
手下の鬼はすぐそばへ寄ってきて、
「それ、とるぞ。」
といいながら、ぽきりと瘤をねじ切ってしまいまし

た。でも少しも痛くはありませんでした。

ちょうどその時、夜が明けて、からすがかあかあ鳴きました。

「やあ、大へん。」

鬼どもはびっくりして、立ち上がりました。

「明日の晩はきっと来い、瘤を返してやるから。」

こういいながら、みんなあわててどこかへ消えていきました。

おじいさんはその後で、そっと顔をなでてみました。そうすると、長年じゃまにしていた大きな瘤がきれいに無くなって、後はふいて取ったようにつるつるして

いました。

「これは有り難い。ふしぎなこともあるものだ。」

おじいさんはうれしくってたまらないので、早くおばあさんに見せてよろこばしてやろうと、首を振り振り、急いでうちまで駆けて帰りました。

おばあさんは、おじいさんの瘤がきれいに取れているので、びっくりして、

「おや、瘤をどこへやったのです。」

と聞きました。おじいさんはこういうわけで、鬼がい、しちに取って行ったのだといいました。おばあさんは、

「まあ、まあ。」

といって、目をまるくしておりました。

二

さてこのお隣のうちにも、これは左のほおに、やはり同じような瘤のあるおじいさんがありました。おじいさんの瘤のいつの間にか無くなったのを見て、ふしぎそうに、

「おじいさん、おじいさん、あなたの瘤はどこへいきました。だれか上手なお医者さまに切ってもらったのですか。どこだかそのお医者さまのうちを教えて下さ

い。わたしも行って取ってもらいましょう。」

とうらやましそうにたずねました。

おじいさんは、

「なあに、これはお医者さまに切ってもらったのではありません。ゆうべ山の中で鬼が取っていったのです。」

といいました。

するとお隣のおじいさんはひざを乗り出して、

「それはいったいどういうわけです。」

と、びっくりした顔をしました。

そこでおじいさんは、こういうわけで踊りを踊った

ら、後でしちに取られたのだといって、くわしい話をしました。お隣のおじいさんは、

「いいことを聞いた。ではわたしもさっそく行って踊りを踊りましょう。おじいさん、その鬼の来る所がどこだか、教えておくんなさい。」

といいました。

「ああ、いいとも。」

とおじいさんはいって、くわしく道を教えてやりました。

おじいさんは大そうよろこんで、あたふた山へ出ていきました。そして教わった木のうろの中へ入って、

こわごわ鬼の来るのを待っていました。

なるほど、話に聞いたとおり、夜中になると、何十人となく青い着物を着た赤鬼や、赤い着物を着た黒鬼が、貂の目のようにきらきら光る明かりをつけて、がやがやいいながら出てきました。

やがてみんなはゆうべのように木のうろの前に座って、にぎやかなお酒盛りをはじめました。

その時おかしらの鬼が、

「どうした。ゆうべのじいさんはまだ来ないか。」

といいました。

「どうした、じじい、早く出てこい。」

手下(てした)の鬼(おに)どももわいわいいいました。

お隣(となり)のおじいさんは、それを聞(き)いて、「ここだ。」と思(おも)って、こわごわうろの中からはい出(だ)しました。

するとひとりの鬼(おに)が目(め)ばやく見(み)つけて、

「やあ、来(き)ました、来(き)ました。」

といいました。

おかしらは大(おお)よろこびで、

「おお、よく来(き)た。さあ、こっちへ出て、踊(おど)れ、踊(おど)れ。」

と声(こえ)をかけました。

おじいさんは、おっかなびっくり立(た)ち上(あ)がって、見(み)るからぶきような手(て)つきをして、でたらめな踊(おど)りを踊(おど)

りました。おかしらの鬼(おに)はふきげんな顔(かお)をして、

「今日(きょう)の踊(おど)りは何(なん)だ。まるでまずくって見(み)ていられない。もういい。帰(かえ)れ、帰(かえ)れ。おい、じじいに、ゆうべのあずかりものを返(かえ)してやれ。」

とかんしゃく声(ごえ)でいいました。

すると下座(しもざ)の方(ほう)から若(わか)い鬼(おに)が、あずかっていた瘤(こぶ)を持(も)って出て、

「それ、返(かえ)すぞ。」

とわめきながら、瘤(こぶ)のない右(みぎ)のほおへぽんとたたきつけました。

お隣(となり)のおじいさんは、

「あっ。」

とさけびましたが、もう追っつきませんでした。

両方のほおへ二つ瘤をぶら下げて、おいおい泣きながら、山を下って行きました。

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年６月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：林　幸雄
２００６年７月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。